撮要抄

へ 4
1467

門へ 刹 4
號 1467
巻

僻案抄 上 古今

明治二十一年購求

古今歌

神むちてむかしみのこはまうの紋
きつきいすの風やうく雅ん
ひらそ（?）ゆきしまとよふん地代調もしの
一人こみとよめんるの哥や古上に古歌悉く見合係
撰所ハ延喜の昔川おこなやいまの世乃謹
よ世へうつれとそいまし然うら勝し
春あそて花とやめつらむきつゝ雪乃
これふえるにうくひすのなく
後うつらんとハうつらんといふ物ほし なえぬうらんと

へらく今日子歌は見てもむしを誂のことに
ちらひて此よろしむかしよりさらん萬葉集
または歌はくよせいのみんといふ説付らか也
其の用
ごく誂さしゆくそめてしれらうれそ
ぶし出しへね宮乃まわれとなん
杉重れしをむ川の説居されてとしむ色し
とのふ杉うれてふそて下句んかくこて居も
哥にはよむ詞されとこくよき説杉を用へし
とそ中されし

春日野のとぶひの野守出て見よ
いまいくかありて若菜つみてん
春日野に飛火野といふ事あり烽をそう
続くのゆへといふ春日野飛火野の人を野守といふ
いふ野守飛火のゆへ焼をのたれをそてし見んよしいく
かゝるてまかれつむ程よかりのへいふそといふ也 一
飛火とは日野の森といふ不一翁
とくみ若菜へはるの春はものいとに
あらたまれしとも初子の糧く
もくちとうとはくひとを祝ふ文春にはさ波

くれなゐのはなのいろにそめてもあけの衣を白
みるともふとくゆきとそれもうくひきてをむ
袖とひ名にそのはるはしに常にきて春しめ
らくひとの歌にまかれて柳をなきになしつま
なきつも柳はつなりしされしとりくちとふおもう
なとひもさむるへしとはさまてねまや
春くれしを春くへ親なりおもう雲乃
春行ありふしとやはくまし
みちゆきぶりとは道ゆくんはいそのんのみちゆきぶ
集より出ほこの春秋にふりし物もいさうそ

とおもひそめつるころもつくしまさる歌の詞

まておもしろし

春の夜の闇はあやなし梅の花

色こそ見えね香やはかくるゝ

あやなしとハあやもなくひかさき事をあらくさ

なくさといふ詞ハ源氏物語なとにもおほかり

ひかことといふ事も梅かしさ海乃くまよふ紀

詠を梅ほくりんそてこれ紫ほか人の屋ハかくなし

ならはしうもとめて梅の法の美を頌を

あちのくはらん山のさくらを

たまてりもとめて梅のはなとハ多くたちまさる

てをりつるといひそんとはの多くのあれもおくおほかれハ花

まろりしといふ梅をとくおほかれハ花をおもひてこそあれ

かきしといふなり梅といふ花ハ俳事とんそて

さし事いふて梅の花おくいふうちなるみ字を

そよりの世花の字ハ歌れしうそのうへき

さくらも恙くちるゝ身てふも

人れさう詠よあり花やさきね

ひさくろのひれ乃とをきやしとさ紀よるとしおもし

むさき人といふ梅なしふんへんそてあるまやよ

まねきつれをあはれやきこゆらんといふなるあと
いふかあさ宿りせんに牧場の事也あまのはらさく
らされしとよしみてまてさきしさあし人は
あはれしもをしふる志らくやらむれさとをよ
まんかえまく見し

又風兵とたふ乃あまりそ紀そあけ
志く紅はたくやら川みふをとらん
としきさてあけといふのそこさそといふかなる志る
はかしとい曽れうへよもろ事ハとかうかと云
まうゆふとはにはたかうれ秋ま風あそまると

とは是かきんかまそまか事ハんはかくうと云
也あふの紅ふとハ秋をあみも天の神まろへう
是にかゝり桜くさいかへ
まみえとゆふは地く去へしとすの様なかれ
なのときさうに神のひまさ海し
ゆふてといふまとハ志らしかそといふんえ瀬や
流くも志らしも神なし ん也
いさ河とる秋もちりなんむしきさら
ならなむ人よう紀あ用んてなん
むとさらしと紀あえんやようきあてきみて 終

桜乃花ハちられをちりかたんとの人為を見られ
みつきんをなしおまをいはきうりをいみ字古
たゝんすまりむけりつきて定と歌まの頭ハ是周
粒りきらゆきとてあしね鎌なをもとも事
字んものゝことやられ日かの事かとまるへ
自筆といひて人もかしらの粒をもとそへ
てはひあつらいて清ら事ハ千賞ての手
りわられ
こ此歌の人きんにやまあわらねさくゝる歌
ほんおかきれさへ月ものとく歌なし

ことあらハしをゝゝくあらはとはなし之
志ても花のこと世のさかなかといふことをお
せいなんと
二梅の山をきみも此これはちうのにと
やよしの桜ねさかやさく桜ん
志のをうきうの桜をくれの世させをうれのせ
いふことはなり
いさ字に吉乃山をふまいつきあん
をれあなたけの花のうあとは
をれ花はなむとへてかれぬともあつるへき

それ乃みきりハ秋を花小まよひまて移る
むと読るなり
またとにたるのさかりハありける花ぞ
あはれん事ハいぬちなりし室り
是なるあとくまいかくんさとう花ともとの世
ちりとも世のつ○なうへさとく読し
むうくハ文もう色りさるまし
読むまの法○なくさとう紀家のなあれちきも
ん是たらふまし花いと稍つ○なうへとそこる
あつをおしろふきうしめ

読なへ事いまは人小梅ん立つ巻
雲との御こる花もちうる花
あ海をへてきなかへてえとちう事はうとも
なかそとともうく
秋のとちうきの山亀小ちらも重そ
うこともいそねあむ稍し読しろ
思ふとちとハ稍よ人とちむさたる人てそこそ
さしてもゆ八の山まり寄む稍なへしろ
てハ走くしうふといふ桐をせまと思ふ事
をさてもおありかしけふとハいふ世

鄙しからぬ所は里のおきまことハ所の事ハ
なほ跡もしく海士の袖もしほのかう
あらはるとハなかれかすくといふ人之あまさとハさと
とりまきてなけれ袖は人々も稀らしく海にとよ
よし也
盛りやまて山ほとゝきすにしつかへん
我世中にとゝまりひねもすよ
やよやまてとハやすらひまてとのふんも時る
わきそかの事をさもしは忘るれハ我世に親とも見ん
ちひね我もとくさまへとハ見れとそ

あり月の雲色に隠れぬれは
春の野をしるくなく鶯ん
わか袖とハ雲色うく盛りまといふ也ととく
ともに夢も志川まくれさら紀あんとのふんと
ひとつ花やとも恋しき涼しきに
猶くらしとほしもなきそまつらん
春人ハとハ又色くもしとのかよみ字たる稀を
もしへとの事也
春の盛よりさりき今月の影まれを
人流くしあ秋きさに分り

浅茅抄つなりき事并例の事に物ちかく見え
月とうたへるとめて其記説とい一つものなり
のかよむ歌の中にふくてあり記深あらし総をおなじ
ものなき事例さ鏡をさへてるの鏡の是海に猶
つまきれる月落とへ出すりいる月也物ちる見えれ
とかいふ色なきものあらし月ふりさうし物也
といふしまさの○とよむ也うらん
いふ事と八時を見え○と秋の夜を
菊申はる半此うきり舟り寄る
いふ事とへ日月とへ見る○とらいつゝ三み宇之孫

もいふてとけても
白やくにあるの○うらいふ事とする屋乃
うへさへとゆう秋乃夜の月
世の中のうらさへ鏡さへむしころ面流と云の月い
露りてて在のものゝけり事さ紙断さえ
家とにとへ月乃うれさへ書しらふみもんつう
月の毎の光こりいふ事世へうれ面流ありとと
花ふへと月
我いへ月いろなる次を見るのなくもへり
八十一 きよる 風かは月る事ふる余

此哥は須磨にて播磨潟須磨の人へて詠し給ふとなり
てまつらんとし此歌ハさふらひし文
にあるをみ給ハおもへし時の氣色枯風さし
し数行の涙ハさるに有けるなり秋よの
へゆく秋萩乃中よ梅かゝせてをとおさとめつ
庭しき此ものゝ所ふさけ花も盛時あり
事なれとも此人の門庭なとに有ぬ
ありさまをともめのまへに見ることに
とに詠て思しは後よ袖かゝらん人を
風ともなきとひかへるへし

あひたりありて人にしれ是を見るあはれ高安郡には
まいらぬよしおもひて此物かたりなきかくしと
女の見けるかたちてうち物思ひをなるよしひとりと
ゆく女なしと此歌をよみ物語をなるよしいふこと河
されは此所さらなく時田舎編をなしひて
家しれることひとつけるを地とひとりかへく
田舎の人の子ともの井のもとにやゝしく
いひあひて物にしてゆふ井のさかひてほど安
蕃あらんに人まうでくる物語しき海に
ゆきたちしもせむ地大和河内なとふとあはま

袖くもりし中山ふりくにし神しくいつくんより
あ西し玉江乃流まら井ゐくや人のゆくよ
あくら不忍し
姫萩ありうき秋袖もてかのしひさの
山しぬとこ見ん康乃ゑくなるか
うらむるうらみれとはくしは袖袖とおもう
涼へきらん定あるへうし娘もなましいはらか神る
しら露え
打ち寄る見え袖らそしめくさ秋露の
ふた夜今宵秋
えらも今日も有しまけりあるかな露

えてこそたちゐ縁ゆふ河乃浪とゝまらし
いつまでと露乃ちとくとて枝のなかくもひ
露けしやふるさと何し
雪ふれはたゝえこそなかなかに蓋も
きえしし様の如何さ紀なる
たえてふよしとはなきとてこそあはれ中秋に事
春も色もなかく時雨にうつろへる
さそこすうしき色もうしのさくやこのさる名
西ゆらうす涼しくしすまり
すゝむなく秋乃露亦たきちて

なましひにしくへ人めとひけりとさるゝん
其ころより古今の撰者を仰し時を
うれへて康の外ゑとなりにけり萬葉集
まはちかきをとりたる代ゝの部にてしく
いとこにあらはれてゝ古の心にくる康に
うたのえさらをちかたとなへけるは古の心れ
てまこ姫の藤原にあつて康とふをひきうらわ
歌遊流といふ細川もと経の子と経て後さ
あさなき入りたへきこえしをのまつを
柿本ひとさらあるの末流なり

けさにあまりけ物なし其之比人渡胡
ゆかりの物なし人之ともひ給し紀貫之
あさなき宇に世の中さことに後の人のひつくるか
紀をしもかに見え給ふの萬葉集ま八物か
くあさ[illegible]けとくに絵の物明しんへ文字すゝ八
紀ふ合とりさこらのいかん日の明ちりとわ
こりとうとひさのとくにあさ[illegible]けよりんゆき
山さんあまりんは
人の飯りのさらなり[illegible]く物ほとく
いこまうしといひそのいまの魚あたりなん

人ありとは人の庭のまゝ秋しらんい
ころしとゆひそ伺りかんとしめかて他人座り
なられとい羽をんうちとり事といふ也
物名　きとうんなし
さゝ　はとおもしかよひちおりまは
秋白露庵き〳〵へしさらまし
庭の本りもひちおりきは秋乃雨そくら
さらましとよ絵へりし文字八まへのさ終
そくさう時あり恨く實乃なお風人をぬし
かよひちとふをおしくい岩をさひかず

なり
いさゝめにときまつまにぞ日はへぬる
心ばせをば人に見えつゝ
いさゝめとはかりそめの事也萬葉集にいさ程
ふる程人いさゝめにかりにせんと読くり
えあやていさゝめに報りしそのよ見この
歌りさけり茂きとひとよ庵すまそり又いさゝ
こ事尓よりよ羽根とかうさ取そ事しほん
あつまの秋霧乃おもひまいつかんいとうをとるを
はしきれなくやさ月のあやや絵へらき

あやめもしらぬ恋もするかな
けりやめをしらぬとハ人のあやなきに紙さへ
ほましくしるへのひあくなりてあや袖て
しらくひたりみたりとのつきけりやめとハ深ねい
ものをとりなく袖てありのうしひのうつまて
文なとはこもの さとくかなし文あとのめこの袖
とねのあめのあねもひあらめ手もつひそ袖
ゐてふかしかくてまよれしくもかるねと紀ハ文とめ
とのまよしねの事ふきをんもほまとめもみて
ねときはあや袖もしらぬえ身くれしのくる

色ならうちそとをれくあや袖ゆられぬめりとす
あとぬなく紀との小袖のまうしきたるも世々まて代ん
みくらうへい袖よりたそもしまをとしねく人も絡
よりわる若の人中院まてハ借の大めやうふ
こし袖みえよいもそみふあまのくしらかふのとをき
世のよりく扇をさし事をもやうつそめてらし
くまかつうくそと流くりかい之
まつうあはれとて袖の下つそすても
人りうつ後をゆきいしくつく
式部のりつよりそれ四つひうすてきそしかんなにかをりれ

ねるまけことそしう色しさへてえそれを云
詠よ物は由さるへき趣ありあまそやかなる田
きれうらしきやくくよんを物さるしう以
とハんとうまたらとらうさ式集乃物く小たせ
世中乃更後さはきかたるとらてれも中く
にうまうるとくうしと清る也
名所もはれたきそよ物をわよ
なま川まりうく人とあふとて
まとの雑もとは日乃つりぬる山ふむらう乃
きらくえまらのかりさるやうよかん由れ也

のそこ乃手ふも似るとまて文録の手外
よりしふまたる物をかまとなまり事うれ
とよゆえの頌ふまるしてらそつさ事なし
室之録と読ふるもまれをそてなれと録ハ
よ花へゐん歌るへさ事しあらん
我う乃梅此歌（古今）川ゑふうくひすの
移りぬさねるてさ恋の色ゑうかる
理つえとうさて花そにたつとつきるか
おつとそはえ梅なし　事梅の花乃枝之
但文はつえはかある枝をあふと云説もある也

とやされしに萬葉集に柳をもかつらとよめ
さきりされも同月十二月に讀る歌之
いそ我とんみならぬ梅そ柳にみ乃
梅その色りにも猶梅にふらそ
万葉集よりんりらの色にもふうさねなとつふ
も柳にもよりやうの事し此歌の心とらを
うきねなき語にりら歌て宮にもふんとき
此なる我なき無りける水をとく見乃宮にさし
いふ頃あまとしこそれたらひさく中なく思
色ひそ柳をもふりしとそ書録し

あさ宮乃さまれなりてふんさけてく
まつりもの柳りひの哀なり紀にみるが
さてふとハ宮まれなりりくりうけそとるく
和也宮乃まねかしれなりくわらくをと
世つりとくそけそとハさ
よろ人なと角をとうとそく宮まそつまと
藤ろつを花かけとなりふさ
よろへとハ思ひへて立よりさのむ縁あとまさ
あさりもち也に無縁りきしまされんるとよう
應承しとつる世此事ししたろんとい給よ

此歌よりもよみ詞よもとり当ハ昔乃人へきこえ
うひ學者まなくいひつたへたる代ちの紀世
まさのくしらへひるかたるを見えさらく
ぬるもの源氏物語よ似たる義面白よう人のれ
とよみたるは狂歌より神家よりて能く入る
水くなと自由ふいひなしたる也抑
此物語乃ふるきの巻くはきわ見えさりけりや
いふかひなき事也　後撰集に
滋幹
なりとよりきしてはまゐて母より

まれそようへもなきなりしまし
うれしき心ねあハら紀貫之になりけるん
流まなさく人りよう人志ら猿し
ほうさハ我なも三礼ときさいそん
世代ら人あふかれるあもくなり
此歌をよみ更なるなもこれときさいてなん
世をとうかへよふそうあもくなしとよみく
なふとやさしき事なりしハ海乃色さ
まわのあもくなるれそうなくへら紀いそなん
と続けたるとおひて給さ船路後撰乃秋さ川

知ものいはく見わたしといふ歌をよみ出し
の海へふとゆりあまのしたりけるしてさ
よりてこしそ御覧ありさ給ひと前なるね切り
も見てとふとながれさうきやれて紀海へ
名まふとて御覧ありし萬葉集の巻第十二ある海の
見てきたる人のかきさる紙をときそてき
たる人きたりて見てさ海乃ほとりゆえさり
その川さゆと思ひさのみこそ石をわたりおほり
まの枕りふく人よりしとの女の字くん
此歌乃んたしくて枕りふり中のいつなきとしより

いてあんとあやうく枕りのしますなかれあ不
此くみよしの女なまくんとわつかねば白い
て紀ゆくりとしつ世まはさるしとへ補海口
白紙つひまかりしより

萬葉集　但馬皇女

人ことをしけみこちたみおのか世に
いまたわたらぬあさ川わたる

隠撰

よしある紀寛すまひはゝきなきし
かりにかくひそいふ事し物紙

なとしきりしあたらまもしらぬまに
とこなん露きのそくもちらんをゝつゐに
ちはもとあまたりて法のあふ物ゆへもあるく
わらいそらぬとそ之

一万葉十一
玉乃をのくゝりよせつゝ末終に井に
移きて縒のゆへ物わしをふあはん
緒つるふいとをふあはんとあき露乃
いのちきハまり窮りし事いと
然ゆへりいてかりひそのちつるよ

かろしと思ひし顔ならす有けり
二十
たかまとのぬへたよるひの高まつのふ
ちよふ沢まん日乃大君も
緒つるまたふ法るまたて物わしんとはん
まてら世しの夜引乃まひまのいとをく
里人しらくもゐしんと思ふこゝの京
もろひて紫の縒末乃ことのちと緒まて
縒乃たきのちさきこさそくこさ
君のちぬらはまれそうみすく

此事ハ和歌浦といふ所ありしくかき
つましといつくし
あかしの浦のむかしのことはしきしとよみ紀
貫之こゝろはは歌のうたかすく
かやうに歌よみのかた説ありとつくりまへ
たとへはかくのつうたまをこれもさかたの合
あるとこそ申されし
寛平殿上哥合に此人
梅をいとやさしのうたをきりし紀つらゆき
またよりも梅をし鳥殊せんといふとよみけり

とかくの人々しつのゝ小倉山あるへうり
中々はつかに鴫の羽かきのはね
ことにそくしちのはしりかきは心にといふ
よとやかさとそ猶まれ給しもとより
はるのとうちれそしつ紀まそくへあきとい
むかしにはあかふるかわあき奇なるれし
一首つきそよまれしなるへ種をひねといへきる
とよましく遠くそくさき寄りしあてん
うたつゝ小倉来ららへさしは名先人その
うた種をひそ思もくとよへき山里りしのかたり

くまなき御世に月をあまねくてらす人の
深山木紀のもの今はとも法まてつくへき
宮の松ちよふともえ君しなけれは何の為にかれ文勅
撰せのきよき様ゝまさにさをもつまことも
ひかりつくまへ給ふへし
いましはしやまひふしなとをさくらふかる
うちふみる我をこそみ恋ふ
と恋しとは是人の総に誰わりもしけの詞あるへし
いましと思ひとりて人にしらるものをさくらふ
乃又人をまつ川色ゝつる我をこそみむかや

いなりし也　万葉第四
今時者名之惜雲吾者无妹丹因者千
遍立十方
いましはしなの惜しけくも我はなし
妹によりてはちたひ立とも
しはしといふ心をいましはしとよめる證歌也
いましはしといふはしはしなりあまた
ばかり
これをもちてしるへしとも紀
なをしるしつるかいかにあらむ
いそしるら我をさいへいなかなかなんしとひて見る也云々

源しんと云つゝ饒葉のかゝり第之趣此集之中
宗匠をいとしよめるに六周之
水の面にしつく花の色さやかにも
君のみかけの思ほゆるかな
志つくとは詞をしつむと云へし心よりから
を沈て底へいりむさるも又水に入て志つくとは
月よあかりつれとも水よりうつる又水の下
なる花を派よりいへるやうなれとあらはれたるを、
をいゝたれもさそね底の影の幾にて之
此花にて

菊水のけ多れ源の流をくみまる
志つく庭ともあましてや見よ
万葉十九
あしひきの山のもとにしたしくあるそ
ちらん山路をみるか志しよく
秋の池の水の菊の枝の影くしかれて志ゆ
下に見るやたる底に水のみけれ於もる
しよの絵んる也
催る哥
うつしさるかまへなるやとうるの壹九

あやえのちねふたしまたつくやましらたま

はくや

きこともよもしのちきふ白人をも

二人絵みのあれこそしき

し哥させる纔あらつき侍ままふをもあらは只つき

らつもと人のたちけなくて萬乃ことのはをもむし

のこころひとつをえたふつきそこしてのひとの

乃てらつくしさを尺しいふ乃也

然あれ乃こゑめや川らこと縁き乃

つきか流をけ抑さらにおかりき

たまえれ乃こゝめ飛あふとをそとはむく

哥とうたふあ所むされたあらあ字かゝ

あら波いふあしあまさら歌くら歌まも哉く

ここそかふよみつゝあるる事はさの所作ゆらあ

しむされ乃たんはとのまをえれをさ人か事所

あまつく事にくしさてあされ乃絶ものうし

ことあらあとまゑるをそあるまんとやうむ

かしえれも野営線之風俗の歌ようをそまむ

たりこえい

さんまえはまとしぬもまれ乃あるましえて

いよくみすく信しき表かられ
さら利とは不意らしならのらしなよし
しまふんらんぬ人まさらんぬられとなずしき
きぬ手をかきる親身をせめさるん
語ひをは心からわれ倫しきのを
なりる親身をせめさこ家んとハ貴来らんとハ
欲惑ならよし毛詩常棣乃詩よ兄弟閲墻
外ハ禦其侮とら閲の事とあるとふをいハ
也なくたふまし多れと此詞つ人のとひか
らく同事なら様を貴来まそいかなき

こらの然かりふらつも雪の赤をも拂をもと
りもくる梅くまらうわらを
それと八雪の梅をれそのらを梅さくら
万葉
乗くふらよ梅さあそこけを川をとめ
ちら緑をもののよなく子るをれ
よとさるてなく川子るもへしらよ
書の人もあみひきりかれ
えやうり法ひきる詞
去りよ家ん為も人よの中ハ

彼のきつきり風そし色紙分
風そ志く紙表紙裸可ふ色志く摺り風の
吹しく秋の聲吉法りわきとめね玉そちり
〻〻もよ紙り志きりにあく風を成しハ光
風う志く紙らともいふ之
世中乃うまくふあさね物く山乃
未熟りしふ稽乃雪や未ふ備し
うるくハ世中のさときうふ物るし事也山さうさ
風乃さむまくふと実紀しし之未熟ふ未ふる
雪にいそえて物く山之も也なるまししとよあるへ

未にいをいりて未ふ色あつね行乃よの
ちしまわの方ハなり ね思て也
ちしにはよ方と八すりし未まになりわるらし也
内観るわ乃身ハ托りし丸津ふ入肉をして又その
津ハあれき備ふ色なりりるれを本のもあくれ
未ふまるをあつしの成ちし身ありりかとよと待つりなれ
そいさたり観方とうきたうとの色いりそ
も物れし之
世中ハいつまてのきしてよの多らへん
稽くと備うををやとくさまともゐ

和歌乃あらしハ風ふてき舟となれとも
ゆく家志ろ孫にまてひ流くらぬ事
風のさへありかさくれぬ藝乃かハ
極くおかし庭にならぬ為となり
此三首読て謹ゐのよれりたり紙古今うりを
紙おん紙わらいさらりたり後撰より紙もゝ事
あるりとさて基重吾中されたる古今さつ定
庭まゝる時のものとらハ閲申しに指事あらゝ
孫と手付く
長哥

かくあるハ田ひとられて常乃宮乃
名れにあおへく極りへも
あふのあなれもなをやさまん
全容ゆさとゝろハ閻浮乃あまれともとふ
とうさたるありとそ後る閻浮ハ人界乃身か
まてハ物とつしと極へとさかハほとつふうし世
流れともよの流ハのなる詞ずも片つ孫と浮
よへるまつやうありてらうハ中されたるあなく紙
難労難なれともなしてひつて入るり波注付く
与穢れと極りへて字さりのて示まり浮く

をんちらして
懐宏集ニ云これを物にへていはゞへのくだり
あらせらるゝのかくてハとすゝしとら
ことは淮南王劉安が仙薬を服して仙に
のぼりしと紀をくはしくふかくまゐりし鶏
なきわれ紀りなりて雲のうへにて啼きけると
いふ事也
またひさんへ履をけまして
金谷園としつかひさへいやうされそいはそ
いよくをくれをしいふ事之跡也とあらし

粉粧楼川のおしとぞ作し
旋頭歌
春されば野辺にまづさくみれどあかぬ
花まひなしにたゞなのるべき花の名なれや
花まひなしとハ花もいひなしふくまゐるへ
こたへれの名なれやとは花といひなしまゐらう
なにとやうとふいひなしのかんとの心也
哥とぞけむ序
是でをいひて世事れたるねへくきこえぬは
きゝぬべく也物りきり多ろうこれはそのゆゑ

なりかやうふかくやうに花をいひなしたれ
すひなしとかくる也
ここ緑さのいそさらなりしいそふ清む
見えさすわかきとれ物さふ物れなと
めさし一説あまのいさりをとて物とりいふ
龍の居うする物之一説海苔となしとよるめ丸日とハ
居くめさきし打りてとれてめさしとふ竹
河竹り竹川乃をしの清めなりやとしの
清めなるや花その小歳こそけるてや歳を
も沖つ白くや見えさしありてめ乃まうろへと

いつとさとなりぬへくや
ひか緑とさやよとかしりまれなく
よく清り常緑治さや乃中山
なれなくとハ心りくとつ也よ清り宮都
ま物せるといふ一説あまとその山さや乃清り
にあとして宮都よあらさるにやよこ清ら
くや潟とさたりかのまくやれをふきうも
物れしき語といふ貴之日記り河氣よりの物也なそ
さしのかに東乃方よ山のよこ清まるとし全
とくて居とこ乃ことといふ古今撰者山のよこ

ほまろ代見んそしとゝろゝまほりゝせらとふ
歌りる侍くや
序詞ゝ中
まくらの詞書のられも浦ひきくなくして
金葉集とそまく羅とハ見れうとふゝと然
なりとかしきれゝき而の字をまく篇とつふと
う侍し而の字なんちっと抄わくゝかとりまかけ
乃事ハ法ゝ人家本ハ元んをとよふらん沿る祖そ
まつ方を而公とふるおらうつゝまあまも
公乃字つきゝしれと事あや田てきゝ人為る人

而字唐韻ハ乃之音也自端之須之類之也
玉篇人之切諸助之辭之文類之也
物名記
をゐ波乃本
木乃名れ浅ゝ枕よりきなく之書に此とらうひ那
ゝ木の名を自為これと毛をゝ世まで浅る集にりとさ
いふ為かし古歌とそ抄くあり書に河をゝ波
ゝの称ふさまくけて抄とりぬ時のまゝそなゝさ
それ歌そゝふみくきて西もし字ひとつを略
しててつゝや狭衣とゝふ物語あり

昔かくありしを思へば我なれやさしくおもひ
のくらく候とある
此物語は禅子内親王〔花登院〕宣旨はへりけりと
きこゆむかしの女こゝろのみはかれじはのよく
つまはあはれなる事をなげきつゝもれし候ふ
やありかんはくやしさ思ひ
かゝふらかりそれさせられ給ふ
其日ぬんといふもの名をもつ者
大臣の北の方の日
十年より時もいましく禍とす

おてきたる紙にひそりとかんなのしきこゝろ
其ほかもおかしきことなしとおもひ侍り
ひそかの風かなる事まで中々ひとせ
禄しあれそはしる事あらそひきこゆ

人名寵

物かうはくとひかりと申す姫こそ侍
禄し今宮とて寵とし思ひしを見ちかう
あたりさるは堀川右大臣のつくりし御まかり
とうきよりの女あまたに重宝もしくちよくと
すされたり

たゝかんかりハえつて争しや
あるいハ内中をも外宮法門をあらそひしと
いふこの様也

後撰

あれ御門のみよし後ゝ夜ちら於へく
書きふくり以も柳ゝ後ゝまゐる
梨つ御れらのしろ夜とはゝをさろ御のふ事そ
うの鉄さらんつきうゝりふ志らきさうさ鉄きうく
春さふうりとれゝろゝるとよめつゝ一方葉ゝ集よ
そこれしろ夜とりふ字みゝさろうや此集りけん
のしろ夜めてれどもきゝうと清ゝ久本原宗興
梨壺れ後ふよ纯ゝると見ゆ古文古錦とて世にさわ
これしろ夜らつとききて早り唐の稀ともうゝ八

うつし鏡のきよきをみるくハ浮くしきてきよくのよゐ
奥代夜ともしぬろゝうや蘇氏耽蓉たゝくとむこ
歌のれしも上古とらみえて哥
きゝみえてつきゝんへもゝりしれ我前れ
梅乃ちゝりゝふ粉りほくしてん
こそこうへつきなそてみゝへつきといゝ也
春の池乃み藻りあそすほとりの
はしのりゝるさ蕪をもむろゝのれ
み藻りあそふ鳴とりあしのりとゆかふきゝふよ
あらゝ也

山ふかくいりてみれは年ふりし乃
梅の花さきて梅りてちるさくらん
高砂やまの名所なれとも山をとほる
さくらの花をは所々にのこしみなれは山よりて
よみけるとはいふ梅のくへと八梅のくんとの事
春乃事なれはいてあそひてよめる
梅の花ちるそふかくいりし春風乃
ふりつもれはなくうちにひさしの軒
紅の花ふりてはなと梅のにほふ歌とも紅
布とさかへふりつもるとは物をまじと秋ならむ

物あはれとなふたる事の志くくあそひきき
梅の花をふりつもるとはひとへにみとそ見ゆる
うつり行かは春へもしよのなれとふりつもる風に
きて西行なし
柳の家乃ちりひいりうきてる春柳に
いまやわくらんうくひすのこゑ
なにひいりふきそれ門乃いり口をよみとゆる
行ちりくとこ云八せしうくひすの
あくこゑさけしあきるなせて梅ん
よをここ云よりきれとこあふりふこま西へのまる

せう桜も藤袴なとの詞かれしとふかき紀河八幸し
おりふしの桜をやかれ事おほかりのは
時うつりにまかる事しとおもふかなり
うきつ○もたえりきける所也
かきつ○もみな古今桜色ふるとまろ枝も
し 事也
桜さくへはやまとうたの人の玉のつる
ちきて桜のむしあつひてふる紙
やまとうたハ八十氏人とうけりふある
おほくのんとまかう事まろくハろくよおろかなと是

よつきて宇治川をやまとうたとしむすよ又たち
こきて当代宇治里人をやまとうたとよみけは
頌秋注のり
あつひくあらむ神の袂の露にぬれて
月のかけもや秋とみえつらん
こ桜も月のかけもとうなりきまへ事のうた説よ
よりて夜の景と秋しろうハ脩事也月照平
後夜景かふかきつとよめる也
あふりやあまの川かもなのきれらん
桜らくとしもなくまつ見るらなん

鶏みまへそこ井ともなくとつかぬをたかる
ここにことハそれしれもなくまかせん上
いふ心ハ紀氏成大納言筆に見そこみところ。
書れしその流ハ清く覆し
蛛をれし雅楽を残す出の糸をりみる
糸のあやと之雅楽のこぼるらん
雅楽也とハのこれ雅楽を伶人にもほうぞ
これ云る雅楽国より渡て何ゆゑきよしの纓
葵乃あやとハそれそこ糸の伊勢しれ給の葵
のあやとそれしれいきことゝある也あやとハ綾也

あめしらんとハあはれむ心
山風乃吹きあれにくもみだる葉を
これをあはれむとりもうくる也
春さ乃やよひくさハうるはしくまつりとゆかる
し心也といてやよひくしとハ陽気といふ故に
神まつりともいふ也君のやよひく神のやよひ
御ん神のかみとみすし也この色のもとハ
この国の国よりかわるん之藤波山といふ
よあといふ事ハいまといつくしききのかの
事也

むくしへハいつもいつくにさらぬ由ハ
秋雅にあれハ云しをかなり
いつれくものおのおもひにあそふ枕かし事也
枕とのよ秋雅ひとつあらかなり
かなしく露やなかれてなく雁ん
しかのこゝ雪かし秋雅ひとつにえ紀のかなりかなき
神なひの山のもみちをとりたる人の舌語之
愛しうこゝかのさとのもみちしさ度
ささて多かやとくいふ人そかなき
たゝやとくかすやもとくと此詞をを文のなきを

多くつる也
柞とは川なきしもるすゝく紅葉あるの
ここなき人なりあつてたゝし絶や
ここたと云詞ハ其名なりハ寧なとつくる詞
座せる枕とひとつ事にハきなくてあつそいと
いつくしの詞をされもとよかひとつをもそらぬ
たる人とはしふかうこき人と云つゝ甚
よめりといふ説ハふつくみたるそ志のくけ汁の
座右たる説也人なりつくれてハいつくれ害らの詞
万葉集十七

もみぢ葉をふみて分ても路乃末とをくみゆ
久しき時をも紀りけるかれ
十七
常乃さ眠にむかふさくらを
君のみて見ぬ花ちるらんやも
源氏物語
うきみしてのとけき波の音寝よ
古へ人をしのふのちや
つまこくにそへてもうらみ思ひしれく
事物語をいひそかはさて西ゆくらんかさ

なか浮世し
なかめしと恨けりの君に袖ぬれまて
うきこんをとし乃たきうち染や
ほとなる程ハふつまてくも滑こえ紅葉
あるいはとやくしくて紀のまてあ
詞乃ん紀うる人のん侭なるし
りやうね文路りゆたふかたりとみけハ
あまの川そらにあさき露りときけるか
夏乃うら見えたつのまつ思ひなきさ露やとを
とふかり

かゝら歌よみにかひの歌をかんしうるのを
かきおきしといふ清きもうらうれ　こと
さるひ乃歌をより古今歌よりかはり
あひ事は古き山をとり乃かはりに縁を
かくいふひと古き様をのこさすして
まねびしのをとりよは新清く古きは綾ときに古き
このうちれをしもかたにそ一首よりは古き高
乃とうまり様をのうそたらくといふまかとられ
あまりやまもり乃ととぶらひおれあるらんは大納
言乃おもり古き山をとりとかはり

あまりにさかり清しの花清き乃かけ
ひとへにも思ひまれや覚えつる
かの清く色わしのゝみのふかさは覚えれやう
なき物にそ此清きも覚えてそとといふかき世
おもしろく花なきこゝろすゝめねをはえし
いさ物のしくそなるまくみえん
一段より八花さいふかんとかのをは八物のかはり
ふかくのをみれ世をつゝきあしの様乃　こと
まけくも人よりあはれんとそ如し
あしかの心ことれあらは見えつ物とりてまそもみてそ

柳りよんのあまつらかれたまけ動てりしいた
くれたとりはやまあしくありしかへは
二むらいもとふえゐなりけり純
くれたとり者後乃名色あやまあしくあ
やかくに衆しらりしかへさとれみちもゆゑ各
つまふさとて二むらいとくりうら続まそへ継り
雑とみくうれ柳まとり物て雑ん
とへとえきりくいつて本のまん
柳ほとと八新嘗祭にて合代人々え小忌をときうれ
されきへ代別の当事しけふもと我の衆臣

大臣乃名とこそ
清のこまのまふえ本まく伸く柳しこらう
さくもたく次代志くふかう新続
さくもたく次くふきとむあまふとハもくみ
さかにのたくた重ん志くふかうくと続ま
我屋とくゑれむしし乃ま君をのつらハ
柳殊しかさしとさしとうハせめ
よの母とうしのとハ山のまふくかくれなんかと
又柳の歌乃こころと世のうれたよしの小きく
まかんと柳の下り君をのつきをかさしつかえ

山かつる人は業なきをとられてあさるまへにまさて
麻よみそしとうちまつりことを執行しかさし給も
さしてんととり給ふ世
ひさ年の西乃くにふさ志まりま向行しこ
くつこときあれてなくもとかんをえや
みさ志をり八執行しまゆふうひこ乃申まいり
こまりたいうたの葉をたつくふかのそへて歌さ
宣れて歌くとよめり
そちをも業れう色えつまあさらうふまう
りのあくのひハはくとうふなれ

は哥たえたるとうきて捨れを歎しうゆ
人あり家乃雨り八何事もさ後ふやきたに
後ゆりつきてなちもと業と夢まりそちい
紫池よあまえうひはく色こさ物あらんとて
たえたまふうひはくるもやそれあるへえれ
うひつくたえあてうらなる物よあらんと
色をつきあさうふえうと二首よてよまり
へそう歌をとうし執りてなきさ物とやそんへと
歌にあまこなくや池のそちにまりあ乃歌さ
色そうひとり似そろ物もあてへつまこなくうう

ゐなか物やうまふるまひらん大綴にもちちん人は
とられさり
い勢乃うみのあまのまそてくさいと波まを
ふかく入りし筆の海なるもそうるもなか
此句ハ先人命云堆ニ泰宗作談て次以女房
俗菓子一非被仰云此掛物或好土様相撰物
可掛也其生一見ん事二の者上物撰一乱代不
存あ伝依俗於御簾前被見く候不及委細ニ
然上ハ云京来年ハ此物ハ時雅先賢皆わく
之事誤雖適以兆此掛物又大概優以候此事也

伊勢乃海のいまのまくりとくらさえ来ぬ動と被
此歌あまのまくりと有て流遣不給と申物御
中にて書されは筆の紙をく流人ありそそこ
まゐらせとりいかなる紙いと波かしと詠さうらし
基俊卿と申は俊成卿時不知誰人云々
此も清輔朝臣奉為郷のん承り後経多
〇奥義抄進二条院之時まそてくの歌不審加之
被問申為和様云々又於語以着之為法意趣書
此事は始後此掛物之時趣字誤多くて被撰
さりんく多書写事也此事也
永禄 祖近俗 在判

傍ニ云彼時正ニ往来動也時ニ往来動揺シ流
旅傍綾シ流レ此出也云遊ひ州如シ大綱ヲ求ム
まくらの説也
さらに風の川ひろくやさらにいはの
まくらの男とは柳をハさらなん
さらにいふは見えぬ舟うしをかけ柳をひきよせて
ほとりよりいでし
柳されば人みなもあそびに縁も
このたびはまへをよみし
柳されはひきさして柳されければし也

て八月ともなりけれさは流星まうりつかえ
あしたなる人もつきなん
さらに紀乃縁とは牽牛織女の事をつなぐ縁にひく
柳まゝ木をさしてひとふねに乗りて光源氏の舟て
次は柳の男とか結びて縁まさき木乃縁つりし柳を
又鉄思川に春のさ乃讃をも縁と申すなり
煙雅ひまの事依て及往く
かさりの記思ひ乃縁のあくなくつる
かさ紀乃ふつつりもとやさ覚
さひの縁思縁想縁則縁人縁なりといふ事ならん

むらさきの袂乃ひもとく人（袖ふかく）
世にまた深緑の中にも袖ひたしく
あさみとりのそてひとつよそその世
あかそてハ何よりも思ふ乃色の
うしまつ子の緑袖のひやり法く
衛門督公任萬葉集事重く
おもひきや君の衣をぬきかへて
こきむらさきの名をきかんとハ
こきむらさきとハ三位乃袍をいふ之袍ハ一位よ
り三位まて同色四位ハ深緋五位あさ六位みとり也

大臣叙大臣の時着大臣袍四位ニ叙する時
素貴着袍叙三位人着大臣袍庚時ハ参議四
位下左大弁天暦五年二月任権中納言叙従
三位于時右大臣（九条殿）右大将袍をかりしたまふと也
よ四位袍ひとへにてハよそにしてきこえし資
房に記ても三位して袍きあらさむと見える
いし毎もちまりてたりふうちそふき
とひらめくしあまりのところを
花うつるへしとハ住納の情甚自然のよし也
除目推常之事

見こしさうてその世をよしと思ひて
かくのことにとまらてかへらん
小野宮の御かもしとかふとかく延喜十七年誕生
十月十七日御年小野宮摂政太臣子時中納言
左大臣左右大将蔵人頭に任しみちしたしくを
とおしとうきそとうさたりに不審をうたかひそれ
事とかきさ給え此歌乃趣を人神社御参
まきてまうひて小野宮大臣を神社の御へと
相りふたひ事八幡宮御に給へたるめよ
野宮乃ある也延喜のことくのことと大将殿よ

も御参ある也　摂政太臣御所興座 不知物忠平哀云々
うへのこゝろねんれいふくあらされは
ちらちらとれたるに、のへこと
此歌は是れもりえすきたる人あさりや
あらう出るる世人のもの心ひあしとされたり
とやえうへのこゝろとふ書にあへるとも
んみえん
らはさ事にまかる梅もあるものを
あをとふきなにをつかりなさ
高津乃みこの歌難波のもし

とふんとひしきりと命ありて
まいらぬへしきくさめのし
さく法師のとし法人一同続きてとおれ名乃
よし金吾もやきれたれたさそうらへあらめ
但馬殿入道殿の給とそ法く人出家の某
ありさまされとし人の不審歎不審乃事わ
く菓ならい葉の葉末無遊女さとやめさいまあかり
ちれめもくさのとしまいりまさしぬへし
とよ然うくらめ平懐の事なりけり八詞り
あさうらられんをとりてとも云らんと秋風

えんずとし法のまあき事なれえやあさう
うらりとハなそくらりとりふころ拾遺よ
ハなそくうらりと紀さら
そむのまね松乃ちと秋の雅よりも
とらもくとふ不思されそせし
とらもくいとおふくとりよんいとと歌にも
挿むれもねとりふきうも秋風いうあし此の
三の井くよ雑義ともいふるのも師説もあ
うねるもとそのえん
山集能かれ秋ほつる

俊頼朝臣承りハ祖なり又少将家承りは祖なり
此子之敦忠中納言の子を其頼中納言の祖なりし
てよひつきにてきこえける名を選そろへかきて
たりしかも後にふたゝびまゐらせける事也
名をハ八様とも曰とも名づけられと勅撰
継ありしその後もれたることさまざまありなむ。
名ところも大納言承りも祖なりけるとも
又少将これも家中より八藤原敦敏とよばれて少将
敦敏卿と申されけるを又少将とよばれし
佐国朝臣まとくりきたり候事と見えし

大納言承り又定家少将とあまた古今集ども
古注りあまたなく八代集詞も継ぎ和歌道や事
ことふかきも見えまた家々秘伝書業と見えなりけり
なり事ける

[illegible]十大阪

拾遺

うつろはし声も娘ゆくはてぞなくとも
秋霧乃空まよひてひきそなく
うつろはしとは空のかきくもりたる
といへるさまはいふ歌あり　詞云
郁芳合　天暦と同之
春乃野ふあさりきし乃花をひけり
とのかありつ誰人ゆるしきて
ひとつとは世の中のふるのごとしちかく
なりきれはちるを惜むなり

きんしうり露を明りさる秋の樹ふしくは
わくらはとちる秋乃きみのかくれん
さくらうり乃海くふ旅とはいなるかく
とのとりしわさとの秋を紫ふりかけら
ともいふ是れ旅花とさいめふさとくらと
秋ちらていくるとあやぬふこの旅ある
歟　秋乃風をたなとも涼しも
ひのきけとかふ事ふさいありひとい色あさけ
文鳥とて物文化合するとふこれいわきこの世
乃風也とふくまりてつくとあきこの事にしまれ

みな子七みな子ふこのあらしとくらくてよしと
さらくれてさらかは万葉集よりハあまた
古今は撰りハみえると
姫しつきしとのさまりとなさこえしと
うけんこともふしかなり
とらん哉ともなくハ誘ともなくとハり給らふ安
う歌たる歌の詞ありも稀とうやうふ待らさ
ともかは歌ゟ同集よりえろてハひとすり
なん哥まこらん人と枕ひれやまん誘ふせめ候
ろうさくとも焼りしらえてあまきこしれかうすや

是しの出所ともうたえしの
枕まも萬葉ともあの告侍るを
是説りハ出をえあしむきさ古人ゑくるを
よむともちりかくる山田末是とうし 孫の所る
とい事ハ人の繁ハ枕まと哉ふまと書れふ立
語とも出所もたえゝとハよ世ろ世としてその
うん乃ころしらん
物名歌うくしたかなと名と歌の出所を力んかる
しまりの事枕詞のりとくよめへからまし
うへふこし

忍ふし人にしらぬとまちうしか
しましにちしとハ我しハ我のつし
六条にハとハふ関白太政大臣家にて
是いらしき事はともおもへたつの女のうりハ
よし思ひしも
久かたの月のさかねをさうれとも
さえそてハわれこの身なからうり
花のさかね乃あかつきにうかくと
康賀乃むかそ紀
かめのむかてきもとてあゝらと

こ
ちらしてたつらく家ちらりそ
むかうさ八幡のむかひをすてん人の
とよみける
千木中酒成支
ひまれにちりうしつくもてこ山かりさる
ひくらいわるふ人かきいませ
時方重二向さうふまとともひり　續し生六
たうふやつくさそむゆるす
かめの思ひ秋ハかのこゑハ成なき
秋ゝや秋りそのくさりきそ秋ちよ

福やねりそえあふさふかりと君か代し
うちく向ひけるあひたにんとおもふことかなら
す仰さ萩の物乃縄のあけまうれさるね
と福らよろこく桂うんとはうんの代あま
よむ百らとととを待し
いふしとし祝ひしてこそ人へし松翁乃
ちろ寿の梅ハ花やさ咲りけり
祝ひしてこそへしほらこしいとそふめ
る
かのかん百秋池亀ひりあそうそうの菊の

あけとさえてさの色乃てありさ
此宿家乃栽植しく欲和菊黄菊一もとに
さくなとくりしくまよりそもしく大寶
よりこのかた聖代治世のためしめつくる物なら
それとなしと天平延暦弘仁といふ年号のいはく
てられる世の菊和しも菊乃名ありといふつさ
なるふる不審あるへくや万葉集よそろとつ
つる何秋あしん秋わくみ菊そろ乃もしろ多そひ
ま乃ん菊る行そろなとさへてもひきらひなすら
ことをそろとかりろのらむしとかる池乃菊ひ

とさも悦りて人々うちよろこひ九重乃気色て
まこと見事とあらハふさわしく色々こ
と手折しうらもしハ梅か手へやら紅
よろこひのうれしふつき人々詞をたもさ梅く
乃観水常乃とまらひさせられ元春をも
いく結ふ人々き

秋のゆやこゝもそまつそへてゆゑのさし乃
神の人りをそ何雲もこゝもより
ゆう方文りうろうてきく人まもとりくましく
神の人ハ雲乃雲のあさりよ小松乃生ける心

よや萬のふりて手入

万葉集

夕なかくまゝ雨しよりハ行そらふ
さたらきまひし風しく梅雨

十四

清くそ〇乃そらひしりみ雨の源

あしうらとろもさ〇見てなくう

十七

あさ日さしそらひかり見ゆる

十九

うちそそくひのうりかんめる

二十

かんとりし二見松ほのうらをまつひま

みつしやこえの濱

新玉乃あさあけ嶋の八

君まくら蓬んちかさみやむらん

と船のあさけくりう○さひくかすみへなり

翌〳〵代あさちそ色待りなる

けさの船夢居て○なさけうきの山

いみちりなし我れつらし

この比乃あさけまさけとあしひきの文

山殊ちよ雨しき濱しつそなく

十二

そのせとこうちつきけ乃もとろさ

一寸人あさけ乃風下

ふるくくよ紀んみちとこつきあきのとよ文ちよ

うりよまん事いつし

證之語之比右今後擬本集之庭訓之口傳
之席已久雖怨忽忘失違古賢之本經
難吾去矣况依耽蒼乃之謬說乱不成紙筆今迫
耄及之弱顧後嘴之益于愚老之後為数
之遺派之蒙昧推宜爲密之不染筆之史莫令
絶見

嘉禄二年八月日

戸部尚書判

常注付之後指遣相云一人之外更不得之
至嘉禎定之亦依兼高爲之
論之遠付蜀尚少庸見是前負外典説深人於和
語之詞源彼淨手之契約常依被訪宜寝之
違戸不顧狼藉之常更不許披一見之莫絶
已

延應二年六月日

桑門明靜

永禄二年九月吉日　　　　書之

右

此一冊